

特集総括

坂野 達郎<東京科学大学名誉教授>

本号は「個人化する社会と、人・地域のつながり」をテーマに、4本の論文を掲載している。健康であること、経済的な不安がないこと、そして他者や社会とのつながりのあることが、幸福や生きがいの重要な規定要因である。本号では、この三つの規定要因のうち、「つながり」に焦点を当てた。特に、個人化する社会のなかで、人や地域とのつながりはどのように再編され、生きがいにかかる影響を及ぼすのかという視点から検討することとした。

主観的幸福感と社会的紐帯の研究は、親密な関係だけでなく、弱い紐帯や紐帯ともいえない未知の他者との相互作用（非親密な関係）へと関心を広げてきている。石黒論文「親密ではない他者との相互作用から生じるウェルビーイングの価値」は、こういった動向をとらえ、こうした非親密な関係であってもウェルビーイングに影響を及ぼし得ることを示し、コア・ネットワークが縮小傾向にあり、全人格的なつきあいを望まない者が増加しているという日本人の人間関係の変化を背景にその意義を位置付けている。また、このような日本人の人間関係の変化を考慮するならば、社会的文脈を共有する関係、例えば「かかりつけ医」や独居高齢者と日常的に接する職業者のような存在が社会的相互作用を促進するうえで有効であると指摘する。個人化する社会における人間関係を考えるうえで示唆に富む論点である。

参加の自由度や離脱可能性の高い関係は、個人化が進む社会における人間関係を理解するもう一つの鍵である。三浦論文「社会参加をとおした高齢者の学び—自己・他者・地域への認識の広がり—」は、この特徴を備えた三つの社会参加の場（高齢者大学、絵画教室、就労トライアル事業）を対象に、参加者インタビューから学習過程を分析している。その結果、参加者が活動を通じて「自分の価値」を再発見し、社会課題の理解へ広がるという、自己と環境の相互的な学習の循環が示される。このことは、参加動機が楽しみや満足といった快樂主義的な欲求を充足する社会参加の場であっても、自己の成長に喜びをみだし、他者や地域・社会への貢献を通じてユーダイモニックな自己を実現する場となり得ることを示している。

池田論文「高齢者の地域活動への参加は、いかなるかわりのなかで生まれるのか？」は、著者が作業療法士として取り組んできた研究成果をまとめたものである。その独自性は、「人は作業（生活行為）を通して健康や幸福になる」という作業療法の理念にある。ここから、地域活動への参加が、身体的健康、人とのつながり、生活

リズムの形成といった側面を通じて、日常生活全体の活性化へ広がるという、従来の社会心理学的幸福感研究にはみられないプロセスが示される。さらに、地域貢献意識の高さが多様な地域活動と有意に関連することや、男性高齢者の参加を促すためにどのような声掛けが有効かを具体的に論じており、石黒論文の「非親密な他者との相互作用の価値」や三浦論文の「自己と環境の相互的学習」から得られる理論的理解を実践的な側面から補完する内容となっている。

菅原論文「ソーシャルメディアと地域活動にみる高齢社会の新たなつながり」は、オンライン交流の役割と可能性を、SNS利用者アンケートと地域活動へのICT導入事例から検討している。SNSアンケートでは、オンライン交流が趣味や関心を軸とした「もう一つの居場所」として情緒的サポートを提供する一方、深い関係性は依然として対面の知人・友人に依存することが示される。また、地域活動へのICT導入事例では、対面活動にオンラインを組み合わせることで活動の幅や参加者層を広げ得ると論じている。「もう一つの居場所」は、個人化が進む社会における人間関係の一形態と理解できる。ただし、この関係は対面の場合でも形成され得る。個人化する社会において、技術が拓く可能性が人間関係をどのように変えていくのかについては、今後も注視すべき重要テーマである。